九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アウルスの欲望 ： フローベールの『ヘロディアス』

大橋, 絵理
長崎大学大学教育機能開発センター准教授

https://doi.org/10.15017/16855

出版情報：Stella. 28, pp.79-90, 2009-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

アウルスの欲望

――フローベールの『ヘロディアス』――

大　橋　絵　理

『ヘロディアス』の登場人物は３つのタイプに大別することができる。ひとつは，ヘロド，ヘロディアス，サロメ，ヨカナンという『新約聖書』のなかの人物，次はマナエイやファニュエルというフローベールが創作した人物，そして最後は，史実では存在するが，年代的に見るとヘロドの饗宴に参加しているはずのない人物，たとえばローマ帝国の執政官ルキウス・ヴィテリウスや，その息子でローマ皇帝にまで登りつめたアウルス・ヴィテリウスである[1)]。ただしルキウスは『ヘロディアス』で描かれたように，事実上アラビア王と戦うヘロドを援護したが，アウルスの方はヘロドとは一切関係を持っていなかった[2)]。では，なぜフローベールはアウルスを，史実に背いてまでヨカナン斬首の場面に登場させたのか。本稿では，アウルス登場の理由を探ることで，フローベールの創作意図の一端を明らかにしたい。

１．アウルスの身体

フローベールは早くからアウルスに多大な関心を寄せていた。たとえば彼の読書ノートには，スエトニウスの『ローマ皇帝伝』を読んだ折の感想が次のように書き留められている[3)] ――

Aulus Vitellius, (l'empereur) naquit le 24 de 7bre sous le consulat de Drusus César [ill] ↓*an 15 de J. Ch.* et de Norbanus Flacus. – ↑*Ses parents effrayés de son horoscope* ↓*son père ne voulait pas qu'il eut de fonctions publiques*

Mignon de Tibère, d'où fut surnommé Spintria.

Plut à Caligula α à Néron par son adresse à conduire les chars était de la faction des Bleus.

aimait les gens de basse condition, rôtait en public.（VII）
– dès sa jeunesse（adolescentulus）ami d'Asiaticus – brouilles α || raccommodements –
consultait une devineresse allemande «Catta mulier»
très g[d], visage bourgeonné, gros ventre.［f. 22（669 v）– I, 27］

アウルスはローマ帝国「4皇帝の年」の3番目の皇帝だが，在位が1年弱と非常に短く，また特異な性格の持ち主であった。そのことからローマ皇帝関連の書物でしばしば言及され，同時代の歴史家タキトゥス[4]，スエトニウス，ヨセフスも少なからぬ枚数を費やしている。なかでもスエトニウスの『ローマ皇帝伝』はそのスキャンダラスな内容で知られ，史実との異同も指摘されてきた。にもかかわらず，フローベールがアウルスにかんする情報をとりわけこの『ローマ皇帝伝』に負っていたことは注目に値しよう。アウルスの何がフローベールの関心を引いたのだろうか。

まずシナリオの段階でフローベールは，物語に初めて登場したマケルース到着時のアウルスについて，「とても太った」「にきびがある」という2つの形容辞をノートf. 22（669 v）から引用して，«Aulus sans ceinture, en pantouffle, très gras, bourgeonné»［f. 127（734 r）– I, 173］と記している[5]。アウルスの軍歴・政治歴といった歴史的重要事項よりも，その身体的特徴がフローベールの関心を強くひいていたことが分かる。実際，彼が創作として付加した「スリッパ履きでベルトもしていない」アウルスの姿は，ローマ帝国の貴族の権威など微塵もない，無国籍者のような印象すら与える。

続くf. 136（712 v）では上記引用に«débraillé»［I, 187］という語が加えられ，f. 238（555 r）になるとフローベールの創作部分はさらに増す――

l'on vit en ⇓ *descendre* ⇓ *en baillant* un adolescent couché ↑ *étendu*
Sans ceinture, en pantouffle, très gras, bourgeonné. || bagues ↑ *comme une courtisane.* – Sa barbe couleur lie de vin – yeux ronds α hardis – chairs || molles α blanches［II, 144］

ティベリウス帝の命令で救援に来たにもかかわらず，「ワインで染まった髭」をして，輿のなかに横たわり欠伸をする様子から，アウルスはヘロドとアラビア王の諍いやローマ帝国の損得にはほとんど無関心で，戦いよりもむしろ悦楽を

好む性質であることが示唆されている。また「高級娼婦のように幾つも指輪をし」，身体が「太っている」ばかりか，「柔らかく」「白い」と形容されている点も性質描写を補完している。

だが最終稿になると，逆に彼の身体表現は «Il en sortit un adolescent, le ventre gros, la face bourgeonnée, des perles le long des doigts.»[6] と簡潔に描かれる。まず注目すべきは，草稿 f. 238（555 r）の単なる「指輪」が「真珠」に変更された点だ。この真珠こそはほとんど唯一スエトニウスの『ローマ皇帝伝』に依らない表現であり，それゆえにフローベール的アウルス像の決定的特徴となっているからである。「真珠」は無生物だが白く柔らかな光を放ち，鉱物でも生物でもない独自の魅力をもつ。「髭」や「高級娼婦」という明確な性差を伴う語彙の消去に代わって出現した「真珠」は，もはや「指輪」という異物ではなく，«des perles le long des doigts» とあるように，指とあたかも同化しているように見え，アウルスの身体を中性化する役割を果たしているといえよう。

ところで，アウルスのしどけない姿が到着場面で削除されるのは，その後の饗宴の場で彼の特異性を際立たせるためだったと思われる。実際，草稿 f. 355（619 v）で，ヴィテリウス親子は次のように描写されている——

> Vitellius toge || blanche, n'avait pas quitté ↑*ses cothurnes* son épée ↓~~*son*~~ ⇓*un* ↓*glaive à* baudrier. [...] Aulus ~~torse nu~~ ↑*frisé, festonné* – || épilé, torse nu ↑*collier sur la poitrine.* – ~~Car les manches~~ de sa robe lilas ~~nouées dans le~~ || ~~dos~~ ↑~~*comme un ouvrier*~~ ~~p. manger plus commodément~~. [II, 330]

父親は当時饗宴中にしばしば起こった暗殺を危惧し，逃げ出すための靴や剣を準備している。だがそれとは対照的に，同様の危機にあるはずのアウルスは上半身裸で無防備な肉体を晒しているのである。つまり策略と陰謀が練られる危険な場になればなるほど，アウルスは衣服を脱ぎ捨てるのだ。また「脱毛した」という人工的操作さえもが付加されて，まさに剥き身の裸体という印象が強調されることになる。このような身体表現はさらに修正を施され，最終稿では次のように描かれる——

> Vitellius gardait son baudrier de pourpre, qui descendait en diagonale sur une toge de lin. Aulus s'était fait nouer dans le dos les manches de sa robe en soie

violette, lamée d'argent. Les boudins de sa chevelure formaient des étages, et un collier de saphirs étincelait à sa poitrine, grasse et blanche comme celle d'une femme.[7)]

ここではルキウスの武器や靴とともに，アウルスの上半身裸という言葉も消去され，代わって後者の着衣が強調されている。柔らかで肌触りがよい「絹」で織られた「すみれの色」のラメ入り衣服を半分纏うことで，アウルスの身体は妖しいエロティスムさえ醸し出しはじめる。そのイメージを増幅するかのように，f. 355（619 v）での「労働者のように」という比喩は完全に消し去られ，ネックレスが揺れるふっくらした彼の白い胸は明確に「女性の胸」に喩えられる。かくて彼の豊満な身体は徐々に柔らかさを増し，花や絹，豊かな髪，宝石と渾然一体となることで，ほとんど女性化するのである。

ではなぜフローベールはアウルスの女性化を，マケルース到着時ではなく饗宴の場まで遅らせたのか。この問いに答えるには，『ローマ皇帝伝』の読書ノート f. 22（669 v）で，アウルスが «Mignon de Tibère, d'où fut surnommé Spintria» と形容されていたことを想起する必要があろう。「スピントリア」について，スエトニウスは「ティベリウス」の章で，「ティベリウスは密室で，各地から入念に探し求めた少女や稚児，《スピントリア》と呼ばれていた怪物的な秘儀の発案者らが 3 人 1 組となり，交替で汚しあう情景を眼前にして，衰えた性欲を刺激しようとした」[8)] と記している。さらに，「ヴィテリウス」の章では，「アウルスは少年の頃から青年の初めにかけて，カプリ島でティベリウスの男の愛人たちと一緒に暮らした。それで終生《スピントリア》という綽名の烙印を押され，彼の肉体上の魅力が父の出世のきっかけとも原因ともなったと考えられていた」[9)] と述べている。

この「スピントリア」という言葉は草稿には見られないが，f. 249（566 r）では，«La fortune ↑~~*Le pouvoir*~~ ↑~~*La fortune*~~ du père ~~venait~~ ↑*tenait* ‖ ~~de~~ ↑*à* ~~l'avilissemt du~~ ↑*du* fils. ↑*α* cette fleur des fanges de Caprée»［II, 162］と書かれる。直接的な言葉を排除し，ティベリウス帝を指す「カプリ島」や，「スピントリア」を象徴する「沼の花」という比喩を用いることで，フローベールはアウルスの同性愛を暗示していると考えられる。そして，この表現は最終稿にいたってもほとんど変化しない[10)]。

これに関連してフローベールは，読書ノート f. 22（669 v）の «dès sa jeu-

nesse（adolescentulus）ami d'Asiaticus»というメモも『ヘロディアス』のなかに取り入れている。くわうるに，饗宴参加者のリストf. 99[I]（744 v）には，アウルスについて «Son jeune ami Asiatique»［I, 124］とあり，明らかにフローベールはプランの初期段階からこの愛人を饗宴と結びつけて描くことを考えていた。当初，愛人はf. 350（627 r）に«son nom ‖ syriaque»［II, 324］とあるように，シリア人とされていた。しかし草稿f. 355（619 v）で，アウルスが厨房で見いだした12才の少年は，«↑*ne pouvant prononcer son nom l'appelait l'Asiatique* α qui lui plaisait. ~~Ce jeune homme~~ très beau ↑*air* stupide, ↑*toujours souriant*»［II, 330］と書きかえられる。ここでは愛人の国籍や民族は一切示されず，アウルスが名前の発音ができないため単なる«*Asiatique*»と呼んでいたとある。いっぽうf. 380（642 v）では再度«son ‖ nom syriaque»［II, 380］と記される。ローマ帝国がシリアを属国とし，その総督がアウルスの父であるだけに，シリア出自の規定は愛人の所有物としての性格を強調すると考えたためか。

このような逡巡をへたのち，フローベールは最終稿において，次のような一節を選択するにいたる――

> Près de lui, sur une natte et jambes croisées, se tenait un enfant très beau, qui souriait toujours. Il l'avait vu dans les cuisines, ne pouvait plus s'en passer, et, ayant peine à retenir son nom chaldéen, l'appelait simplement : «l'Asiatique». De temps à autre, il s'étalait sur le triclinium. Alors, ses pieds nus dominaient l'assemblée.[11)]

最終的に，愛人にシリア名ではなくあえてカルディア名を与えたのは，かつてカルディア人が新バビロニア王国を建設したことに関係があろう[12)]。王国はローマ帝国と同様にユダ王国・パレスティナ・シリアなどを支配していたが，紀元前539年に滅亡してしまう。その歴史的事実からカルディアはローマ帝国のイメージと重なり，後者の将来の崩壊を予測させるといえる。なによりも彼はアウルスと同じく，本来なら饗宴に参加しているはずのない人物である。それゆえ帝国内部の争いを達観するかのように，饗宴の場の民族間対立において，愛人は一種の傍観者として描かれるのである（会食者一同を«dominer»しているのは彼の裸足である）。さらにf. 355（619 v）の「愚かな雰囲気」という形容

が消され,「絶えず微笑んでいるとても美しい子供」とだけ記されるのも，彼の客観的立場を暗示するためであろう。そして，このような愛人についての記述は，アウルスの身体描写の直後に改行もなく続けられるのだ。この事実は，愛人と「ひとときも離れること」ができず，無防備な女性化した姿で饗宴に列席するアウルスもまた,『聖書』の歴史的時空間から超越した傍観者たることを示唆していると考えられる。

このようにフローベールは歴史書を利用しながら，登場人物の身体をまずは中性化，ついで女性化させ，さらには同性愛的要素を徐々に強調していった。だがそれは単にアウルスの卑俗さや退廃性を描くためではない。むしろ身体や性癖の超越性によって，アウルスを聖書的な倫理や道徳から逸脱させるためだとも推測できよう。ではいかなる理由から，フローベールは上記のようなアウルス像が『ヘロディアス』に必要不可欠だと判断したのだろうか。

2．アウルスの食欲

そもそもスエトニウスやタキトゥスが記録したアウルスの豊満な肉体や食欲の凄まじさを無視するわけにはいくまい。なによりもフローベールは最初のプランからすでに，父親やヘロドの思惑をよそに饗宴の準備に気づいたアウルスが喜ぶ姿を記し（«*Aulus s'en réjouit*»［f. 89（726 r）– I, 109］），シナリオ f. 149（703 r）では，«L'air sec de Machœrous lui a donné g^d^ appétit»［I, 207］と書いている。一貫してマケルースが舞台であることを考慮すれば，アウルスは食欲を満たすためだけに物語に登場するかのような印象さえ受ける。

実際，アヴァン＝テクストを執筆順に読んでいくと，彼の食欲は身体描写や見習いコックの愛人の挿話だけではなく，ある重要な側面へと徐々に関連づけられていくことに気づく。たとえば草稿 f. 358（646 v）では，アウルスは饗宴の場で次のような状況に陥る――

~~Les Pharisiens –~~ ~~«Pour cela il faudrait qu'il fut~~ ↑~~*Il est donc*~~ ressuscité ~~dit un des Pharisiens~~ ↓~~*ils croient à la résurrection*~~

Lamech. – «Certainemt ! ~~*a* il est ressuscité~~.

Hilarité des Sadducéens. […]

~~L'indigestion d~~'Aulus. ↓~~*Il est*~~ *couché sur le lit. se presse l'estomac, roule des yeux.*

– *Sueur froide.*

On croit qu'il va ↑*allait* crever［...］

↑*Mais Aulus fut brave. Il* n'avait pas fini de || vomir qu'il voulut ~~se remettre à~~ *re*manger［II, 335］

ここでは，ヨカナンが蘇ったエリヤではないかという議論が交わされるため，「再生」にかんする言葉がくり返し使われている。そしてまさに議論の最中，人々は過食による消化不良で激しく苦しむアウルスの姿を見て彼の死を危惧するのだ。だが，アウルスは食物を吐ききり再び食べはじめる。食の行為が生命の維持にあるとすれば，アウルスはあたかも生へと戻ってきたかのように見える。

そしてこの描写の持つ意味は最終稿においていっそう明確なものとなる――

Nec crescit, nec post mortem durare videtur.

Mais Aulus était penché au bord du triclinium, le front en sueur, le visage vert, les poings sur l'estomac.

Les Sadducéens feignirent un grand émoi ; – le lendemain, la sacrificature leur fut rendue ; – Antipas étalait du désespoir ; Vitellius demeurait impassible. Ses angoisses étaient pourtant violentes ; avec son fils il perdait sa fortune.

Aulus n'avait pas fini de se faire vomir, qu'il voulut remanger.[13)]

アウルスの極限の苦しみは，「死後肉体は成長せず形もとどめない」[14)]という，エリヤの再生を否定するために引用されたルクレティウスの詩の挿入直後に始まる。唯一ラテン語で記されたこの引用が，アウルスの状態に無関係とは考えがたい。彼が瀕死の状態から奇跡的ともいえる復活をとげるところに，詩句に反してヨカナン＝エリヤの再生が肯定されていると見なすこともできる。そこには再生のイメージによって両者を結びつけようとするフローベールの意図が認められよう。じじつ，アウルスの食欲と肥満や「アジア人」の愛人は史実だが，上記のようなヨカナンとの関係を示唆する場面はすべて彼の創作なのである。しかもその後の場面で，父親はユダヤ人への嫌悪から辞去を望むが，アウルスは食欲のため留まることを主張し，その結果として２人はヨカナン斬首の場に立ち会うことになる。すなわちアウルスの食欲こそが，ヨカナンの首との対面を準備しているのである。

だが，アウルスとヨカナンの関係はこれだけにとどまらない。エスキス f. 152（719 r）の段階で，アウルスはキリストについて « c'est ‖ un homme de mauvaise vie, il boit du vin, α traîne des femmes. Aulus l'en approuve »［I, 121］と考える。もちろん彼が好意を抱くのは宗教的見地からではなく，キリストが現世的欲望に忠実だという悪い評判のためである。しかし主要登場人物のなかで，アウルスだけが唯一キリストに肯定的な判断を下すことは看過できない。さらにキリストの血の象徴であるワインは，アウルスの描写において印象的な方法で用いられている。f. 238（555 r）ではマケルース城到着時アウルスの髭がワインで染まっていたこと，最終稿でも歓迎のためルキウスとアウルスに供されたワインをアウルスだけが喜んで飲んだことに，その伏線を見いださずにはいられまい。

ヨカナンとアウルスの奇妙な一致は最終場面で決定的となる。会食者だれもがサロメの踊りに魅了されている最中，過食したアウルスは再び嘔吐を始める。彼はただ一人サロメよりも食物に魅了される人物として描かれているのである[15]。そのような状況で，エスキス f. 160（748 r）に記されたヨカナンの首が回される順序は興味深い――

> Il la met ‖ dans un plat. Elle est offerte à Salomé. – ↑*monte dans la tribune p*^{r} *être offerte* à Hérodias ↓*à Aulus ses yeux ivres regardent les yeux morts, bêtemt*［I, 224］

首が，最初にそれを要求したサロメ，次に陰で彼女を操っていた母親のヘロディアスに渡されるのは当然としても，その後，斬首を命令したヘロドや一番高位にあるヴィテリウスではなく，アウルスへと手渡されるのは注目に値しよう。しかもサロメやヘロディアスの態度が一切記されないなかで，アウルスの行為だけは語られているのである。アウルスの「酒に酔った」目，食欲の赴くまま理性を失った目だけが死者ヨカナンの目を見る光景は無垢の選択ではありえまい。

その後，草稿段階の f. 418（655 r）になると，ヨカナンの首が回されるのは，サロメ，ヘロド，ヴィテリウス，ローマ人たちから僧侶そして最後にアウルスという順番に変更される。だがここでも，首を見たがらないヘロド，無関心なヴィテリウス，興味深げに松明をかざし首を回してみるローマ人たちとは異な

る態度をアウルスは取ることになる――

> ⇂~~*La remet*~~ ↑ *la pose devant Aulus il* ↑ ~~*il*~~ *en fut réveillé* || – ~~Ses yeux ivres contemplent les yeux morts~~ ⇂ ~~*α à travers*~~ ⇃ ~~*dans le noir*~~ ⇃ *par* ⇃ *l'ouverture* ⇂ *leurs cils abaissés* ↑ *prunelles* ~~*mortes*~~ ↑ *éteintes* ↑ α *les prunelles mortes* ⇂ *avaient l'air de se dire qque chose.* [f. 418 (655 r) – II, 436]

アウルスは嘔吐後ふたたび惰眠をむさぼっていたが，ヨカナンの首が眼前に置かれるやいなや覚醒する。皿の上のヨカナンの首が，アウルスの前ではあたかも彼の欲する食べ物のようにさえ見える。実際，エスキス f. 156 (716 v) では，«〈[...] Aulus, qui || s'est gorgé de raisins,〉↑ *au milieu des plats comme des remparts – ivre, abruti, ignoble*» [I, 222] と，酒に酔ったアウルスが食べ物の盛られた皿から離れない様子が強調されていた。さらに使用された動詞に着目すれば，f. 160 (748 r) の «regarder» が，ここでは «contempler» へと変化し，目にかんする語彙も «yeux», «cils», «prunelles» と増加し，ヨカナンへのアウルスの視線をより強く感じさせるようになっている。

最終稿でも，f. 418 (655 r) と同様に，ヨカナンの首は最後にアウルスの手へと渡る――

> et Mannaëi, l'ayant remise d'aplomb, la posa devant Aulus, qui en fut réveillé. Par l'ouverture de leurs cils, les prunelles mortes et les prunelles éteintes semblaient se dire quelque chose.[16)]

最終的に «contempler» は削除され，«se dire» という動詞だけが残される。この選択は，アウルスとヨカナンのコミュニケーションが言語の域にまで高まっていることを示唆してはいないだろうか。またアウルスの「酔った目」という表現も消され，後に残った「生気のない瞳」は「死んだ瞳」との類似性を感じさせる。さらに「まつげ」に付加された「彼らの」という所有形容詞と相互的用法の代名動詞の使用が相まって，生きているアウルスが死んだヨカナンに一方的に話しかけるのではなく，両者が語りあうという印象が強調されるのである。

いうまでもなく，ヨカナンの語る言葉はすべて『旧約聖書』からの引用である。そしてその『旧約聖書』において，アダムとエヴァが楽園から追放された

のは，食べるという行為が原因であった。『ヘロディアス』が『聖書』挿話のひとつであることを考慮すると，ヨカナンは預言者として神から使わされた，いわば天上に属している人物であり，他方アウルスは並外れた食欲や性癖という特徴から，地上に追放された末裔にほかならない。フローベールは，彼らをまずは対極的な人物として創造したのである。だが同時に，アウルスが民族間の闘争やサロメの踊りの魅力に惑わされない傍観者的な人物であることを忘れるわけにはいくまい。ヨカナンが神と人間の狭間に位置するように，アウルスもまた，歴史的時間と非歴史的時間の狭間に位置し，いずれも他の登場人物を客観的にとらえる視点を保っている。そのような両者が「語り合っているかのよう見えた」と記すことで，フローベールは彼らの親近性を暗示する。その結果，ヨカナン斬首の挿話は，聖書のそれとは異なる独自の色彩を帯びることになったのである。

結　　語

フローベールは『ボヴァリー夫人』執筆中の書簡で，「真面目な話にとられるかもしれませんが，実はこれはグロテスクを真っ向から狙ったものなのです。〔…〕皮肉によって感動的なものが損なわれることはない。むしろ増幅されるはずです」[17] と述べている。そして『ヘロディアス』の執筆にさいしても，彼は史実上のアウルスのグロテスクさに魅了され，食欲という人間の根源的な欲望を肥大化させることによって，新たなアウルス像を創造したといえよう。社会的な規範・義務・限界を放棄したとも見なせるアウルスが，聖者ヨカナンと「語りあう」という皮肉な行為は，斬首の場で他の登場人物たちが隠蔽しようとした欺瞞を暴く力さえ秘め，『ヘロディアス』読解の多様性を示していると思われる。

註

1）ピエール＝マルク・ド・ビアジもカルネ 16（F° 49 V° C）の註で，この点を指摘している。Voir Gustave FLAUBERT, *Carnets de Travail*. Édition critique et génétique établie par Pierre-Marc de BIASI, Paris : Balland, 1988, p. 681.

2）ヘロドは，弟の妻であり同時に姪であるヘロディアスと結婚するために，アラビア王アレタスの娘と離婚し，その行為に怒ったアレタスがヘロドに対して軍隊を送った。そのためヘロドがローマ皇帝ティベリウスに救援を要請し，ティベリウス帝がヴィテリウスの軍隊を派遣したが，それは皇帝の死の直前，36 年頃であったと考えられている。一方ヨカナンの斬首は 30 年頃だとされている。だが，アウルスがヘロドの誕生日の饗宴やアレタス王との戦いに参加したという記述は歴史書にも一切書かれていない。Voir Flavius JOSÉPHE, *Antiquités judaïques*. Traduction de Julien WEILL, sous la direction de Théodore REINACH, membre de l'Institut, Paris : Ernest Leroux éditeur, 1900, Livres XVIII, V, 2-119.

3）草稿のうち，読書ノート，プラン，最終コピー，写本者のコピー原稿は Giovanni BONACCORSO et Collaborateurs, *Corpus Flaubertianum. II. Hérodias. Édition diplomatique et génétique des manuscrits. Tome I*, Paris : Nizet, 1991 に，またヘロディアス第 1－3 章は Giovanni BONACCORSO, *Corpus Flaubertianum. II. Hérodias. Édition diplomatique et génétique des manuscrits. Tome II*, Paris : Sicania, 1995 に収められている。本文および註における引用の出典は巻数 I, II とともにページ数を［ ］内に示す。なお，草稿内の各記号の意味は以下のとおり――

italique : variantes interlinéraires

↑ variantes en interligne supérieur, 1ère campagne

↑̲ variantes en interligne supérieur, 2ème campagne

↑̲̲ variantes en interligne supérieur, 3ème campagne

↓ variantes en interligne inférieur, 1ère campagne

↓̲ variantes en interligne inférieur, 2ème campagne

↓̲̲ variantes en interligne inférieur, 3ème campagne

↩ ce qui précède le cran est en marge

|| fin de ligne.

4）Voir TACITUS, *Annales*. Texte présenté, traduit et annoté par Pierre GRIMAL, Paris : Gallimard, coll. « Folio classique », 1993.

5）フローベールは読書ノート f. 56（661 v）で次のようにメモしている―― « Hérode redoutait les rassemblements que causait Jean, emprisonné en 30 décapité en 31 »［I, 67］. ヨカナン斬首の年をフローベールが 31 年と考えていたことからすると，その時アウルスは 15 歳の少年ということになる。

6）Gustave FLAUBERT, *Trois contes*. Introduction et notes par Pierre-Marc de BIASI, Paris : Le Livre de Poche, coll. « Classique », 1999, p. 144.

7）*Trois contes, op. cit.*, p. 161.

8）SUÉTONE, *Vies des douze Césars*. Préface de Marcel BENABOU, traduction et notes de Henri AILLOUD, Paris : Gallimard, coll. « Folio classique », 1975, Livre III, Tibelius XLIII-XLIV, pp. 195-196.『ローマ皇帝伝』からの訳出引用は同版にもとづき，国原吉之助訳（岩波文庫，1986 年）を参照しつつ文脈によっては筆者が改変

した。

9）*Ibid*., Livre VII, Vitellius III, p. 379.

10）Voir *Trois contes, op. cit*., p. 165. ただし，f. 249（566 r）の品位の堕落を意味する «l'avilissemt» のかわりに，最終稿では罪の穢れの意味合いが強い «la souillure» が使用され，アウルスの倫理や道徳の欠如が強調されている。

11）*Ibid*., p. 161.

12）大鐘敦子は，ヘロディアスがヨカナンから「バビロンの娘」と罵られたことをはじめ，このコントのなかにはバビロンの退廃を暗示する語彙が多数使用されていることを指摘している。そして，大食と豪奢好み，また愛人のアジア人がカルディア名であることから，アウルスはバビロンの退廃を体現するひとりだと述べている。Voir Atsuko OGANE, *La genèse de la danse de Salomé : l'«appareil scientifique» et la symbolique polyvalente dans «Hérodias» de Flaubert*, Tokyo : Keio University Press, 2006, pp. 59-60.

13）*Trois contes, op. cit*., p. 165.

14）ルクレティウス『事物の本性について』（岩田義一他訳），筑摩書房「世界古典文学全集 21」，1965 年，341 頁参照。*De Natura Rerum* の第 3 巻 339 の詩句であるが，ビアジはこの引用が不正確であることを指摘している（voir *Trois contes, op. cit*., p. 165）。またルクレティウスはこの著書のなかで，当時の原子論の観点から，神々の名を用いずに宇宙と自然の秩序を説明しようと試みている。

15）f. 408（644 r）では，« Aulus y sommeillait ⤴ ~~*tout*~~ *à plat* ~~se~~ [~~il~~] ~~le~~ ⤴ ~~*son*~~ ~~front~~ ~~app~~ ~~reposait son front sur ses~~ || ~~deux bras tout à plat~~ ⤴ *le front sur les deux mains*» [II, 420] と書かれ，彼が眠っていたという記述よりも，うつぶせになって組んだ腕あるいは手の上に額をのせていた様子が強調されている。全く踊りを見る意志がないことの身体的描写といって差し支えあるまい。

16）*Trois contes, op. cit*., p. 175.

17）Gustave FLAUBERT, *Correspondance II (juillet 1851 - décembre 1858)*. Édition établie et annotée par Jean BRUNEAU, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1980, p. 172. 訳出にあたっては『フローベール全集 9，書簡 II』（山田爵他訳），筑摩書房，1968 年を参照した。